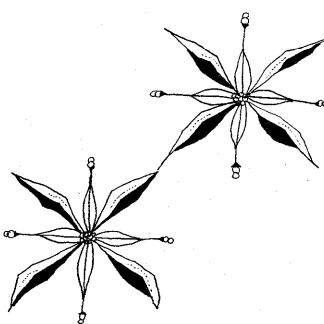


特集〈こだわる〉 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

日々の保育の狭間で

矢萩 恭子

保育実践と保育研究の在り方との関係、"書く"という記述行為と"書く"主体との関係、意識作用と認識内容との関係、精神と身体との関係、言語化され言葉に掬い取られたものと言葉の網の目からこぼれ落ち言語化を免れた現象、事実として感得され得るものと真実と予感されるものとの差異、理解へと志向する主体と理解の妥当性、主—客の相克などなど、観念の迷路にはまり込んで身動きのとれない時期があった。保育者として生身の人間としての子どもと関わりつつ、その体験の中から動かし難い感覚として絶えず私の心に責めぎあつていたものたちが、出口を求めてもがいていた。



特集〈こだわる〉

「保育」という現象を考える考え方を、考えて考えて考察の対象としていた自分。考えようとすればするほど、考える自分と考えようとする中身とのありようを、自分が考えることの中で抛り所としている思考の枠組みとの関係において、いちいち捉え直す作業をどこまでも緻密に行う必要があった。そしてそのときに出会った現象学的なものの捕まえ方とは、知識の普遍妥当性とか、対象の実在的客觀性といった事柄について近代の認識論や自然科学的思考の枠組みそのものを根底から問い直すことにおいて、研究主体である自分と端的に研究対象としては切り離すことのできない子どもとの関係性を問うことの意味を考えてくれた。

今こうして毎日を、まるいと現象の中に過ぎず身となつて、當時抱えていたような“引っ掛けり”が恐ろしいほど消え失してしまつた。大勢の子どもたちと時間に区切られた忙しさの中で体力勝負の生活を送つていると、一つひとつをゆっくりと反省し考察していく余裕がない。余裕がないなどと言うのは自己欺瞞である、と謙虚に戒めているゆとりさえないような気がする。ああ、明日もあの子たちに会えるという喜びと期待で眠りにつける日が少しづつ増えてきているのがせめてもの救いである。精一杯の思いで子どもたちと共に一日を生きて、肉体の疲労を与えたられた生活のささやかな充実感が慰めてくれ、そしてまた次の日があるという小さな小さな喜びが今の私を支えてくれていて。

もちろん、以前に比べて子どもの思いを受け止め、他者を理解する力が増大した訳でも

特集〈こだわる〉 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

なければ、自分という存在や出来事の意味についてケリがついた訳でもない。相変わらず、自分は「わからなさ」の中に佇んでいるただの無力な一人に過ぎない。

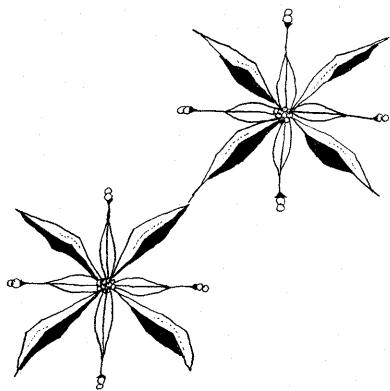
“子ども”という現象が客観的事実なのか、主観としての自分が編み出した意味や文脈に過ぎないのか。厳然としてある個の領野を越えて、他者と交わり、他者を理解しようと志向するためには自己と他者との越え難い断絶をどのように埋めていったらよいのか。偏見や憶測、誤っているかもしれない判断から逃れて、真に相手の存在に迫るにはどうしたらいいのか。そんな三元論的な問題設定はほとんど機能しなくなつたような気がする。正直言つてそれどころではないのである。“子どもと自分”というシンプルな関係項は、大勢の子どもたちと自分、子どもと子ども、子どもと母親、母親と自分、子どもと現代の社会、保育者集団と保育現場といったようなさまざまな関係の連鎖の中ですごく複雑になってしまったような気がする。とは言うものの、子どもと自分との関係から出発して營まれる保育の実際において、その極めて個別な、一回性の、主観的体験をもとに「私」という個の枠から歩み出て、研究者としてであれ、実践者としてであれ、他者との対話を聞く為には、私はどうしたらいいのだろうか。

かつて私はこのことについて保育者の記述行為ということを通じて考えようとした。保育者とすればとにかく子ども自身の主体的な活動を尊重し、それに寄り添いながら自分も存在することで、ひたすら子どもの求めていることや、子どもの抱いている感覚や気持ち

に近づこうと過ごす一日のことである。あらかじめ特別に決められた活動や時間割りのよ
うな区切りがある訳ではない。息つくように自然な一連の、ある意味ではのっぺりした時
間の流れのなかで自分が経験したことなどをどのように言語化していくべきなのか、いつも
とまどいを感じていた。自分にとってさまざまな義に満ちた体験を、特定の言葉に固定し、特
定の視点から生きることに対して逡巡していた。また、文字として表そうとする場合、既
に自分が自明のものとして感じ取っている世界を、言葉として自分の内部から切り離そ
うとするときに非常な困難を感じることがあった。その上、書かれた記録はそれを読む者と
の関連においても、さまざま問題を提示してくれることになる。記述行為の主体である
保育者自身が記録を読み返す場合もあれば、第三者がその記録を読むことにより、保育者
本人と記録に含まれる子どもたちとの間で生成された関係や保育的な応答の足跡、子ども
自身のありようを読みとり、解釈していくこともある。

現在、私は幼稚園の一教諭として、保育実践を文字化する作業に未だに苦労し続けていた。忙しい毎日の中では情けない位、貧しい内容の記録しか記すことができない。今日の一人ひとりの行為に思いを馳せ、明日からの保育を考えるゆとりのないままに次の日が来てしまうことも多い。それでも何かしら心に残った出来事や、後になつてでも突っ込んで考えてみたいこと、反省すべき自分の言動などについては記述しておきたいと願う。保育は、実に眼に見えにくい繊細な配慮、眼差しのもとで行われる、因果関係のように具体的

特集〈こだわる〉 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇



(洗足学園大学附属幼稚園)

な成果を見出しづらい筈であると思う。だからこそ、人間としての基盤を築きながら生きる幼い人達の混沌さ、意味不明さの傍らにあってともに生活し、考え続ける価値がある。

今や、保育者を目指す十代の学生たちの実習日誌なるものを読ませてもらいながら、その日その場で流れ去ってしまう自分の保育の実際と体験、そして記録について再び考え始めている。